

3. 病院図書室への期待 —利用者の立場から—

青 山 ヒ フ ミ *

ただ今、ご紹介に預りました淀川キリスト教病院の青山でございます。利用者の立場から、「病院図書室への期待」ということでお話をさせて頂くわけですが、図書室業務に関しては全くの素人でございます、日頃感じておりますことをそのまま、ざっくばらんに述べさせていただきます。

今回のシンポジウムの、「病院図書室の相互協力」というテーマからは、多少と言うか、かなり外れる点が多いと思いますが、その点はどうかご了承願います。

私どもの病院は、医療法人の中小病院の多くがそうであるように、昨年（1985）11月までは中央図書室がなく、それまでは各々の部署で関係のある図書を管理して参りました。今回病院の増改築にともなって、やっと中央図書室が設置され、また専任の図書室職員も1名配属されました。それで、その変化を体験した職員として、中央図書室の存在と専任職員の必要性というか、有難さを強く感じましたので、中央図書室のなかった以前と現在の状態を比較し、その有難さがどこからきているのか考えてみたいと思います。更に今後、もっとこころを、というところも述べさせていただきます。

以前、中央図書室がなかった、また当然、図書室職員のおられなかった頃と比べると、現在は3つの点で非常によくなりました。

まず第一は、当然の事ですが図書の管理が

行き届くようになりました。以前は各部署の責任者が業務の片手間に「私は何で、こんな事をせんらんねんやろ、この忙しいのに」といいながらやっていたものですから、恥しい話ですが、院内にどんな本が、どれくらいあるか、またどこにあるのか、病院全体の蔵書量について正確に知っている人は殆んどいませんでした。たまたま私は、看護部の図書管理に当たっておりまして、時間がある日を見計らって、看護部用の一見倉庫風の図書室で、ごそごそと本の整理や貸出台帳の点検を自己流にやっておりました。

しかし、何分素人は素人ですので、いろいろな失敗がありました。そのときの失敗の一つを話させていただきますと、看護部図書室は一見倉庫風のがらんとした図書室ですから、看護婦がほとんどよりつきません。なんとか図書を利用してもらおうと考えて、向こうがこないのならこちらから出かけて行こうということで、看護関係の雑誌の本棚を女子更衣室に移し、ソファーと机をおき自主申告の貸出をいたしました。その結果どんどん利用してくれるのはいいんですけども、1年後雑誌の半分は行方不明になっており、その年の雑誌を製本する際には改めてバックナンバーを買い足さなくてはなりませんでした。

第2番目は本日のシンポジウムのテーマであります相互協力とも関連するのでありますが、文献が随分容易に入手できるようになりました。以前は文献が院内に無い場合、そう言う場合が非常に多いんですけども、個人

* 淀川キリスト教病院教育部長

の伝手に頼ったり、また製薬会社のプロパーさんに遠慮しながらお願いしたりしておりました。また逆に、プロパーさんからほかの病院から頼まれたんですが、こういう文献はありますか？とリストを渡されることもありました。プロパーさんが、相互協力の仲介者となっていたわけですが、頼む方も頼まれる方も知っている範囲については答えますが、それ以上は出来ず、期待通りと言うわけには行きませんでした。

現在は、度々話題に乗っておりますけれど、近畿病院図書室協議会のネットワークを通し、医学看護関係のものは、比較的スムーズに手に入れられるようになりました。私達、看護婦は、大学や図書館に足を運ぶだけの時間を持っていないことが多いだけに、ネットワークを通して速やかに文献を送って下さることは本当に感謝に耐えません。ただ、慾を言えば、医学以外の分野、例えば心理学ですとか社会学等についての文献は、やはり入手することが難しく、個人的な伝手を頼って頼まざるを得ませんし、医学や看護関係の文献にしても、キーワードで文献を探す場合は、期待していたものが上がってくるのが少ないというのが今のところ実感です。

さて第3番目ですが、図書館の居心地が大変良くなりました。これは物理的な条件、明るさとか広さ、すわりやすい椅子と机と言ったこともあります。それ以上に図書室職員の方の人柄が大きく左右するように思われます。

以前の医務部図書室などは、看護部と同様、一見倉庫風でガランとしており、調べたい本があっても、若い看護婦が一人で入って行くには勇気を必要とする場所であっただけに、今の昼休みに気軽にはいれる雰囲気は非常に

うれしいものでした。

以上の3つの変化を思いつくまま述べさせて頂きましたが、今後更に中央図書室を有効に利用させて頂くため、図書室職員の方に、今まで以上に広く、また深く職員や患者さんの中に入って頂きたいと願っております。広くと申しますのは、今まで図書室の利用者という医師、看護婦がどうしても中心になっておりますが、例えば看護助手とか医事課職員にも気軽に図書室を使って頂きたいと思えます。

病院職員は病院に勤めているということだけで、近所の方だとか、親戚の方から、一般職員も病気の相談を受けることが多々あると聞いております。この様な場合に図書室に専門外でも解るような一般向けの医学図書があれば、少しは役に立つのではないのでしょうか。

私どもの病院の例なんですが、図書ではありませんが、一つの試みとして、3年前から医師から事務職員までを対象とした合同勉強会を月1回開いています。対象が広いだけに、テーマの選択が非常に難しいのですが、3年間続けている内に、素材と言うか、内容さえいいものならば、必ず職種に関わらず何かを得てくれると言う確信を持つようになりました。

例えば先日は、「パーキンソン氏病の診断と治療」という16mmフィルムを放映したのですが、500名の職員の内60名が参加し、その内、医師、主に内科の医師ですけれども約11名、看護婦40名、パラ・事務6名、患者3名という内訳でした。

勉強会終了後、Dr.は「久々のヒット作やな、おもしろかった」といい、患者さんは、「私の症状と同じです。本当にこのとおりで

す。」と感想を述べられました。

問題は、このようないい素材をどうやって手にいれるか、情報を掴むかですが、この点で是非図書室職員の方のネットワークを利用した情報の提供をお願いいたします。

広くのもう一つの対象は患者さんです。

先日行われました国際図書館連盟の東京大会で、読書療法の効用が発表され、注目を浴びたことが一昨日の日本経済新聞に載ってありました。確かに病気になり考え込むことの多い患者さんにとって、読書は大きな慰めであり、入院が生きて行く支えとなる本に巡り会う機会となることもあります。是非患者さんにとっても何等かの形で開かれた図書室を作って頂きたいものだと思います。スタッフとしましても、多種多様な専門職の職員が病院で働いております。それらの職員の求めに応じて、どんな文献がどこにあるかなど、図書に関する専門職である図書室職員の方に相談にのっていただき、よりよいアドバイスをお願いしたいと思います。

最後になりましたけれども、病院はいま倒産が増え、医療訴訟も確実に多くなっています。私どものような中小病院が生き残って行くためにはスタッフ一人一人のレベルアップを計り、いい医療サービスを行う以外に生き残る道はあり得ないといわれておりますし、私達、働いておりますものもそういう危機感を持っております。

そういうなかで、今まで図書室に入ったことがなくて図書室が何処にあるのかさえも知らない人への働きかけが、図書室の果たす重要な役割となって行くのではないのでしょうか。

つたないスピーチでしたが、御静聴有難うございました。

曾 我： 有難うございました。

それではその次に、先程、山口さんもおっしゃいましたけれども、相互協力網を作るためには図書室の人たちの交流が必要だと思います。本日は、東京都老人医療センター図書室の後藤さんに図書館員の交流と題してお話して頂きます。